

ここが大きな壁かもしれませんが、このあたりで挫折しそうになったら、第10講に飛んで19講あたりまでいったら、戻ってきてください

第07講 「成節詞」が「名節」「副節」をつくる

言いあらわしたい「もの・こと」「状態」「状況」が、どんどん複雑高度になるにつれて、「1単語」だけの世界では、あらわすことが困難になってきます
まずは、「成句詞」を利用した「句」というレベルに、さらには、『文。』まるごとを「名詞化」「副詞化」「形容詞化」してしまおうという「節」のレベルにたどり着くのです

「今、山で、桜を見ているの。」「春の光がいっぱいです。」「桜はどんどん散っていきます。」「でも、どうしてこんなのかな陽のもと落ち着いた心もなくあわただしく桜が散るのか寂しくなりました。」というのは、「詩」的ではありますが、一般の「説明文」としては幼すぎます

幼児のように、思いつくまま、『文。』を吐き出せばいいというものではありません

「春の光がふりそそぐ今、山であわただしく桜が散り行くのを見ながら、のかな陽のなかにもかかわらず、落ち着いた心もなく散り急ぐ桜に私は寂しさを感じた。」とでもなるのでしょうか

一般では、「数『文。』」であらわされた同内容を「1『文。』」であらわすことが通常なのです（このような処理技術として必要なのが、「節」です）

このように、思考・伝達の高度化に伴い、一般の「説明文（評論文・論説文）」では、不明瞭にならない程度に、多くの『文。』を「1『文。』」に凝縮しようとするのです

ここでは、『文。』の「名詞化」、『文。』の「副詞化」、『文。』の「形容詞化」という「テクニック（技術・方策）」が使われるのです（『文。』の「形容詞化」は、「形容節詞」を使う特別な技術・方策なので、別に「第22・23講」で説明します）

『文。』が「名形副化」されてしまうと『文。』ではないので、「節」といいます

本講では、「成節詞」という特殊な「品詞」による《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を見ていきますが、ここでは、「成節詞（従属接続詞）」という「構成要素」外の「手段的」な「品詞」が「節」をつくるという重要な働きをしていることに注目してください（「形容節詞」も大きな「形容詞」をつくる「構成要素外的手段的な品詞」です）

複雑な『文。』は、「名節詞」「副節詞」「構成来形容節詞（関係代名詞）」「役外来形容節詞（関係副詞）」をたよりに、解きほぐせばよいのです（それぞれ順次説明します）
では、本講で、以下、《『文。』の「名詞化」「副詞化」》を順次見ていきましょう

『文。』を「名詞化」「副詞化」するということは、「構成要素としての主目補」や「役外状況族」として働かせることであって、もう『文。』ではありません
「元『文。』」であって、『文。』とは呼ばず、「節」と呼ぶのです
それぞれ、「名節」「副節」と呼びます

本書でいう「成節詞」は、従来「従属接続詞」といわれています
「従属接続詞」とは空疎な命名ですが、仮に「従属接続詞」という場合は、そのフルネームが重要であり、単に「接続詞」ということは許されません
というのは、「接続詞」には、「等位接続詞」と「従属接続詞」があって、それらは全く別の働きをするので、きちんと分けなければならないからなのです
しかし、本書では、両者を命名から分け、「従属接続詞」を「成節詞」と呼びます

本論からそれますが、まずは、「等位接続詞」を見てみましょう

(本書では、しばしば、「等接」と略します)

「等位接続詞」は、《「語」と「語」》、《「句」と「句」》、《「節」と「節」》、
《『文。』と『文。』》を同等に連結させます

「and」「but」「or」が代表です

「and」で、いくつか見ておきましょう

Yuki and Tomo are cousins.

「単語と単語」

They write songs in the morning and in the evening.

「句と句」

She knows that they love songs and that they want to be singers.

「節と節」

They studies music and Nari teaches them it.

「文と文」

とにかく、「等位接続詞」と「成節詞(従属接続詞)」はきっちり分けてください

「等位接続詞」は「接続詞」といってもいいでしょうが、「成節詞(従属接続詞)」は「接続詞」というよりは、《『文。』を「名詞化」「副詞化」する「手段的」な「品詞」》ですから、巨視的には「転換詞」とでも「命名」すべきようなものです

また、「接続詞」という名称から、「国語」の授業や試験でいう「接続詞」と一緒にしないでください

「国語」でいう「接続詞」は、「段落と段落」や『文。』と『文。』との文脈的流れを滑らかにする「副詞」的な「接続語」と呼ばれるべきものであって、「英語」の「等位接続詞」や「成節詞(従属接続詞)」とは、全く違ったものとみるべきです

では、本論の「成節詞」に入ります

(本書では、ほとんど「従属接続詞」という語を使いませんが、使う場合「従接」と略すことがあります)
(「名節」や「副節」に対して、本体の『文。』を「主節」といい、「名節」「副節」を「従属節」といって、本書では「従節」と略しますので、「従接」と「従節」の使い分けに注意してください)

「成節詞」は、『文。』を「名詞化」「副詞化」する一種の「装置」のようなもので、「成節詞」は、『文。』が「名詞化」「副詞化」されている場合の「目印」なのです

成 節 詞	
名節詞	t h a t 節・w h e t h e r 節・i f 節・w h 節
副節詞	w h e n 節・b e c a u s e 節・i f 節・t h a t 節・・・等

「名節」をつくる「成節詞」を「名節詞」とよび、「副節」をつくる「成節詞」を「副節詞」とよびます

「名詞」の働きをする「名節」をつくる「名節詞」は上記の「4種」しかありません(「w h 節」については、講を改めて、第08講で学習します)

「副詞」の働きをする「副節」をつくっている「副節詞」は、「副詞3原則」の「Ⅱ意味」の数以上に多数ありますので、講の末に、別表にまとめておきますが、今すぐに完全に覚えようとしなくてください(こんなのがあるのかという程度で十分で、順次、ゆっくり覚えてください)

「成節詞」は、『文。』をまるごと「名詞化」「副詞化」するわけですから、
«「成節詞」＋「完全な『文。』」»となります
「形容節詞(関係代名詞・関係副詞)」との関係で、«「成節詞」＋「完全な『文。』」»という視点は重要なものですから、しっかり認識してください

では、具体的に「名節」「副節」を見ていきますが、まずは「名節」です

日本語では、『文。』に「～ということ」という「成節詞の t h a t 」にあたるものをつけるだけで、『文。』がまるごと「名詞化」してしまいます
こんなことを再認識しつつ、「名節」をみていきましょう

「名節」をつくる「成節詞」である「名節詞」は、「that」「whether」「if」しかありません

あとは、第08講で学習しますが、「疑問詞」と呼ばれているものが、「名節」をつくり、「名節詞」を兼ねています

「名節」は、あらたなる大きな『文。』の中で、「主役」「目的役」「補役」になります

「名節」のまとめ

種類	意味	働く場面
that 節	~ということ	「主目補」
whether 節	~かどうかということ	「主目補」
if 節		「目補」
wh 節・疑問詞節	(疑問詞に応じて意味多数、第08講で詳説)	「主目補」

① Whether he finished it is not important .

名節主役

形補

「彼がそれを終えたかどうかということは、重要ではない。」

② The fact is that she has been ill .

主

名節補役 (名補節)

「事実は、彼女がずっと病気だったということです。」

③ He asked if I wanted to go there .

主

名節目的役 (名目的節)

「彼は、私がそこに行くことを希望しているかどうかということを探ねた。」

「成節詞 (名節詞)」を手がかりに、(元)『文。』のような「意味のあるまとまり」として認識し、それが「主目補」のいずれとして働いているのかを確定してください
はじめのうちは、「名節主役」とか「名節補役」の確定に苦労すると思います

また、「名節補役 (名補節)」の場合は、「主役」の概念的説明になっているので、意味をとるのが大変でしょう (「問題事項」の「言い換え」という、現代文読解の要です)

まずは、「主目補」を確定し、「文法」に忠実な「直訳」に徹してください

例えば、「The fact is that~」は「熟語」で「実は~なのです」と訳すようにいわれますが、まずは、「The fact」が「主語」で、「is」が「自動詞」で、「that~」が「名節補役 (名補節)」というように、「文法・品詞」的に確定させて、「事実は~ということです」と「直訳」するのが真の理解への近道です

⑧「主語」「目的語」「補語」というのは、「1単語」の場合であり、「句」や「節」による場合は、「主句」「目的句」「補句」、「主節」「目的節」「補節」、総称して「主役」「目的役」「補役」と言うべきでしょう

II 「副節」

では、次は「副節」ですが、「副節」にも、「副詞3原則」があてはまります

原則 I . . . 性質

- ①『文。』の「構成要素」である「主自他目補」には、なれない
- ②『文。』の「構成要素」の隙間のどこにでも置かれる（文頭・文中挿入・文末）

原則 II . . . 意味

- ①時、②場所、③程度、④頻度、⑤目的、⑥手段、⑦理由、⑧条件、⑨譲歩、⑩否定、⑪付帯状況、⑫結果、⑬その他様々

原則 III . . . 修飾先

- ① 詞修飾、②形容詞修飾、③副詞修飾、④『文。』全体修飾

「副節」は「()」で括り、排除して、「主節」を確定して読んでいかなければならないのです（「原則 I ①」）

「原則 I ②」では、「(, 挿入,)」に注意してください

では、多数ある「原則 II」の意味をまずは日本語で見てください

次の例文の の中には、どんなことばが入るでしょうか

「私は、私が彼女を好きになった 、彼女に告白した。」

節の意味	副 節 (従属節)	主 節
時	私が彼女を好きになった <u>とき</u> 、	私は、彼女に告白した。
場所	私が彼女を好きになった <u>ところで</u> 、	私は、彼女に告白した。
理由	私が彼女を好きになった <u>ので</u> 、	私は、彼女に告白した。

日本語では、『文。』に様々な「成節語（接続助詞等）」を付けることで、『文。』を「副節」化し、「主節」の「場面状況」を設定しています

ほかにも、「主節」を変更すれば、「条件」の「私が彼女を好きなら」、「私は、彼女に告白するでしょう。」や、「譲歩」の「私が彼女を好きになったけれども」、「私は、彼女に告白できなかった。」なども考えられます

◀「場面状況」の「副節」▶+◀「主節」▶という「構成」に着目してください

では、英文で見てください

節の意味	副 節 (従属節)	主 節
時	When I liked her,	I told her love.
場所	Where I liked her,	I told her love.
理由	Because I liked her,	I told her love.
条件	If I like her,	I will tell her love.
譲歩	Though I liked her,	I couldn't told her love.

英語では、『文。』の頭に、「成節詞 (副節詞)」をつけるだけなので「形式的」に明瞭で、一見してわかります
 (「副節」を「主節」の後に置くことや「主節」の中に「挿入」することも可能です)

「s o . . . t h a t ~」の「再認識」

「程度」をあらわす「副節」も見てみましょう
 「s o . . . t h a t ~」構文というものです

I was very hungry .
副 形補語

「とてもお腹が空いた」と言っても、様々な程度があります
 その程度すなわち「形補語の状況 (程度)」を「t h a t 副節」で具体的詳細に伝えようとするのが、この構文なのです

I was so hungry that I couldn't walk .
副 副節 (「s o」の具体的詳細)・程度

「s o」で「そんなに」といっても、「どんなに」かがわからないので、「t h a t 副節」で詳しく伝えているのです

「私は、私が歩くことができなかつたほど、そんなに空腹だつた」と「直訳」します
「私は、空腹だつたので、歩くことができなかつた」というような、「慣習訳」や「感
覚訳」「意識」は、「入門者」「英語苦手組」には禁物です

「意識」で喜んでいると、いつまでたつても、「文法力」「構造把握力」「論理力」
はつきません

一般では、「不自然な日本語」を嫌い、「自然な意識」を強要しているようですが、
「英語の苦手な人」は「語学のカン」にあふれているわけではないのですから、「語
学感覚にあふれている方」のための「特殊なやり方」で浸透するはずもありません
まずは、「徹底した文法」「徹底した構造把握」に「徹底した直訳」です

そこから、多少不自然であれ、論理的に出でくる「直訳」を納得してから、「自然
な日本語」とやらの、修正すればいいのです（実際は、「記述試験」対策時です）

同じ現象に対しても、「英語」と「日本語」では、受け取り方や表現には感覚等の
違いがあるのですから、無理矢理、「英文」から直接に「自然な日本語意識とやら」
にもっていく必要はないというか、無理です

「文法的論理的直訳」という「中間項」をはさむべきでしょう

「辞書」や「参考書」では、「苦手な学習者」のために、できれば、「直訳」「意識」
の両者を併記すべきでしょうし、そうであれば、ありがたいものですね

「英文」が読めるようになることが「目的」で、そのために、様々な「手段」を
考え、採用すべきであつて、「自然な日本語訳」ができるようになることが「目的」
ではないはず（世間は、なんでまあ、自然な日本語訳にこだわり押し付けてくるんでしょうか）

しかも、「自然な日本語訳」が要求されるのは、「長文読解」ができるようになった
あとの、「答案作成」の段階でしょう

「1『文。』の文法的英文読解」ができない人に「自然な日本語訳」を強要してみ
たところで、教える側の「勝ち誇り」以外に得るものがあるのでしょうか

英文読解を語る前に、論理を指導する以上、少なくとも化学と現代文と古文の大学
受験指導経験は必須なのではないでしょうか（英語一科目のみの指導はあまりに狭に過ぎるでしょう）

「英語が苦手な方」「初級レベルの方」は、

①まず「品詞の認識」と「品詞分解」の中で、様々な「句」「節」を判別し、②「名
語句節」と「形補（語句）」に注目しながら「文役」を確定し、③どの「形容詞（語
句節）」がどの「名詞」にかかっているか、どの「副詞（語句節）」がどの「形容詞」
「副詞」「動詞」にかかっているかを確認し、④「動詞」の使用法を確認して、「文
法的な」「逐語訳」に努めてください

ここで、「英文読解」の「障害物」ともいうべき「同格」というものを紹介します

Ⅲ 「同格」

「名語句同格」

«「中心名詞」が、直前直後に置かれた「名語」「名句」により説明・限定を受ける場合»をいいます

He is our hero Saigo.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で補役だと考えます」
私たちの英雄（「説明部分」）「である」西郷（「中心補語」）

「同格」は「である」「の」で訳して、「中心補語」を具体的に説明しています

Nobunaga, a famous samurai, is a hero.

↑ = 「同格」 = ↑ 「全体で主役だと考えます」

「有名な武将である信長は英雄だ。」「信長は、有名な武将であるが、英雄だ。」

「である」で訳す方法と、「であるが」で挿入的に訳す方法があります
「中心名詞（主語）」の「信長」を具体的に説明しています

「名節同格」

ここで、「that節（～という）」「whether節（～かどうかという）」を使った、「名節同格」という説明手段を紹介します（「if節」は使えません）

ある「名語」に、「自動詞」をはさんだ「名補節」としてではなく、«直接に、「節」による説明を加えたい場合の方法»が「名節同格」です（「第12講」参照）

The fact that she knows it is a good thing.

名語 = 同格節 名補句

「名語句」＋「同格節」全体で「主役」
「～という事実」

この枠内はマニアックなので回避してください

ここで、重要な観点は、「名節同格の由来」と位置付けの大きな視点です
「同格の t h a t」を各論的に提示しても瑣末な知識の羅列の一端にすぎません
「同格の t h a t」は①何のために②何処から来たのかという視点で整理できるかが重要なのです

「The fact is that she knows it .」という「that名節」を「補節（補役→「第09講」参照）」とした、「補完文型」である「元の『文。』」があり（②）、この「元の『文。』」全体を「名詞化」しているのです（手段）

「that the fact is that she knows it」としなくてよいのです（簡便な手段なのです）

高度な内容を「1『文。』」で提示するために、小さな『文。』を「名詞化」し、次の大きな『文。』に「主目補」として投入するのが目的です（①）

以上のように、「現象（結果）」を「原因（由来）」「目的」「手段」等から位置づけられるような視点・思考方法を身につけてください

I have the question whether she will read my letter .
名語 = 同格節

「名句」＋「同格節」全体で「目的役」

「～かどうかという疑問」

「同格節」は、実態的には「先行する名語」を後ろから修飾するような「形容節」的な働きをしていますが、「事実」や「疑問」そのものを修飾しているわけではなく、その具体的内容説明であり（「私が知っている事実」と「私があ的事实を知っているという事実」との違いで、前者は、「何を（事実）」を直接修飾しています）、また「元の『文。』」では「名補節」であることから、「名節」が付加されていると考えるべきなのでしょう（「第22講」の「形容節」参照）

「同格」になる「名語」は限られていますが、ここでは深入りしません（辞書の「従属接続詞」の「t h a t」を参照してください）

「同格」の形式的特徴は、

≪「名語句」＋「t h a t」＋「完全な『文。』」≫

≪「名語句」＋「w h e t h e r」＋「完全な『文。』」≫ です

実質的特徴は、「完全な『文。』」で「名語句」を具体的に説明していることです

「同格」の「o f」

B o f A という場合のうち、

「AというB」と訳し、「o f A」が「B」の具体的内容を説明するものです
「B」に関して「A」が具体的に補足説明しているのですが、最初に説明した「名語句同格」の場合は（言い換えという性質が強いところから）「同格」といってもいいのですが、「o f A」という形からして、明らかに「形容句」であり、「同格」とはいいづらいものではありませんが、「自立文型」や「t h a t 節同格」の簡略形と考えられます（主格の「o f」と比較検証してみると、主格の場合は「o f A」の部分が「主役」に相当し、「同格」の場合は、「o f A」の部分は「補役」で「B」の部分は「主役」に相当します）
例文をあげておきますが、「同格のo f」を辞書で一通り目を通しておいってください

t h e c i t y o f Y k o h a m a → T h e c i t y i s Y k o h a m a .
横浜という都市（横浜市） 「i n」とは違いますね

t h e f a c t o f h i s k n o w i n g i t （「第12講参照」）
彼がそれを知っているという事実
→ T h e f a c t i s t h a t h e k n o w s i t .
（これは、「t h a t h e k n o w s i t」を、「分詞」を利用して簡略的に「名詞化」したものです）

次講では、「疑問詞」が「名節」をつくる様子を見てみましょう

「ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（紀友則）

少し発展的な補足をいたします

「群成句詞」と同様、「群成節詞」（「群副節詞」のみ）というものがあります

「群成節詞」「群副節詞」（「群従属接続詞」）

「成節詞」の場合も、一語の「成節詞」では表せない複雑高度な場合等は、語集団で一語の「成節詞」と同様の役割を果たさせます（論理的には、「成節句」ですね）

「群名節詞」はありませんが、「群副節詞」は多数あります

「a s f a r a s」が有名ですが、辞書で調べてみてください

これ以上品詞分解をしても有用ではないので、一語の「成節詞」として扱います

以下の「副詞系の使われ方」の表を参照し、辞書の例文を見てください

これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策です

副詞系の使われ方

意味	副節詞と群副節詞	不定詞副詞的用法	分詞の副詞的用法(準副節)	
①時	when, while, before after, since, till, until, once <u>as soon as</u> , <u>every time</u> <u>by the time</u> , <u>the moment</u>	as 「as 節」 の有無、 以下同様	(無)	～するとき
②場所	where		(無)	(無)
③程度	so～that, such～that	as (比較)	～するほど	(無)
④目的	(,)so that, (,) (so) that <u>in order that</u> lest, <u>for fear (that)</u> <u>in case</u>		～するために (in order to)	(無)
⑤理由	because, since <u>now that</u> , <u>seeing that</u> for (等位接続詞)	as	～して… (原因) ～するとは(判断)	～なので
⑥条件	if, unless, but, given suppose, supposing provided, providing granted, granting		～したら	もし～ならば
⑦譲歩	though, although <u>even if</u> , <u>even though</u>	as	(無)	～だけれども
⑧否定			(無)	(無)
⑨結果	, so(that)		…したその結果～	(無)
⑩付帯状況			(無)	～しながら ～して(連続)
⑪その他	as (～するにつれて) as (if) (～するように) but (～しないでは) than (～より) while (～なのに) when (～なのに) whereas (～なのに) except (～を除けば)		～なんて(感嘆) 「程度」と「判断」 の不定詞副詞的用法は、「あとひき形 容詞」に続く副詞 系のひとつです (第19講参照)	主節と副詞節の 主語が異なる 「準副節」(独立 分詞構文)に注意 (第16講参照)

ここで、「名詞」というものにはどんなものがあるのか考えてみましょう

I、「名詞」は「物（モノ）」をあらわす

見たり、触れることができる様々な物的な存在に名前をつけて、認識区別する（「分節する」という） 例えば、「石」・・・

II、普通の人間には見えない「モノ」や伝説上・想像上の「モノ」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な観念的なモノに名前をつけて分節する 例えば、「神」「妖精」「オーラ」「幽霊」「龍」「鬼」「麒麟」

III、ある程度見て取れる「コト」をあらわすこともできる

宇宙の中の、出来事（現象）を一言（単語）で分節することができる 例えば、「火事」「事件」「爆発」「活躍」「平和」

IV、見えない「コト」をあらわすこともできる

見たり、触れることができない様々な精神的なことに名前をつけて分節する 例えば、「愛情」「根性」「勇気」
（ここで、物的なもの（無機物と有機物）と精神的なものを区別・認識してください）

V、他の「品詞」を転用して、「名詞」化することもできる

日本語では、用言の「活用」や「接尾語（語末の変化）」で対応しています 例えば、「読む」は「動詞の終止形」ですが、「連用形」の「読み」は「名詞」として転用され、例えば、「読みが甘い」と「主語」に使えます
また、「形容詞」の「美しい」の「語幹」に接尾語「さ」をつければ、「美しさ」という「名詞」になります
英語では、「不定詞」「分詞」や「派生語」による変形が該当します
（「形容詞」happy → 「名詞」happiness）

VI、単語としてあらわせない複雑高度なことでも、『文。』全体そのものを「名詞」化することで名詞として表すこともできる

例えば、「彼は彼女を愛している。」は『文。』ですが、「彼が彼女を愛していること」は『文。』が「名詞」化されているので、『文。』の中で、「主目補」になれるのです
このように、『文。』をつくり、最後に「こと」をつければ、『文。』全体として「名詞」になれるのです

さらに、補足です

少し(かなり)難しい内容なので、はじめは読み流すか飛ばしてください

「第14講」まで読み終わったら返ってきてください(第14講末に再掲します)

「転用副節詞」

- ①「名語句」+「同格のthat節」全体を副詞として働かせたい場合、「名語句+that」が「副節詞」として作用します(「群副節詞」の一種)多くの場合、「that」が省略されますので、実質的には「名語句」が「副節詞」として働いているので、「名語句の副節語句への転用」といえます
「the instant (that)節」参照
- ②「動詞」の活用形態である「能動分詞」と「受動分詞」で、その「動詞」が「他動詞」で「that節」に従えることができる場合、「分詞+that」が「副節詞」の働きをする場合があります(第14講の⑨の表を参照)
「that」は省略される場合がほとんどなので、「分詞」自体が「副節詞」の働きをしています
「動詞」の「活用形」たる「分詞の副節詞への転用」といえます
- ② 成句詞+名語句+同格that」全体が「副節詞」として働いている場合もあります
「on condition that」参照

これらは、1語の「副節詞」として覚えてしまうのが得策ですが(「群副節詞」)、ただ、以上のような成立過程を認識理解していることが理解の論理経過として肝要です

「同格のthat節」の発展的研究

以下の考え方は、「第23講」を読み終わってから検討してみてください

「同格のthat節」の発生由来としては、「In fact」というような『文。』全体を修飾する副句中の名詞の「fact」を「先行詞」にして『文。』を「名詞化(名句化)」しているのではないかと考えられます

そうすると、「同格のthat節」は「形容節」と考えられます

In fact, she knows it .

→ the fact that she knows it

ここでの「that」は「役外来形容節詞」と考えられます